

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

Humanist Rhetoric in Shakespeare: Flattery, Advice, and Womanly Persuasion

論文審査の要旨

[本論文の概要と構成]

本論文は「人文主義 (Humanism)」として知られるルネサンスの知的成果がシェイクスピア劇にどのように取り入れられていたか、16世紀イングランドのレトリック (修辞法) 論に注目することにより、その影響関係を検証する論考である。16世紀イングランドの人文主義については、サー・トマス・モアやサー・トマス・エリオットなどの著述が典型的な知的エリート文化の産物として主に思想史、政治史の領域で考察されてきた。本論文の独創性はロンドンの大衆劇場で上演された演劇作品においても、レトリック論の応用から翻案、パロディ化まで様々なレベルで人文主義の最新成果が貪欲に摂取されていた現象を指摘した点にある。人文主義の著作物とシェイクスピア劇との関連については、すでに先行研究においてどの史料がシェイクスピア劇のどの場面で応用されていたかがほぼ判明しているが、その成果は材源研究と書誌学研究の範囲にとどまってきた。本論文は人文主義の著作物がシェイクスピア劇作品の中でどう応用され、その応用が具体的にどのような劇的効果をもたらしていたのか、16世紀イングランド大衆芸能のハイカルチャー受容という観点から人文主義の影響を考察する。

本論文は序論と3章から構成され、参考文献リストを含め172ページの英語論文である。序論ではまず16世紀イングランドの人文主義運動が俯瞰され、16世紀後半期のイングランド社会で流通した一連のレトリック論がエラスムスやカスティリオーネの英訳版も含めて網羅的に紹介されている。この序論は16世紀イングランドの人文主義的なレトリック論の特質を古典的なキケロとの比較から指摘し、廷臣によるキリスト教君主の教育のあり方について16世紀人文主義者間の政治的な議論を具体的に分析する。さらに、通常レトリックとの関連で論じられることのないサー・フィリップ・シドニーの詩論にもふれ、レトリックと文学的創作の関連について踏みこんだ考察を行なっている。

[第1章の要旨]

本論文の第1章“Flattery in Tragedies” (シェイクスピア悲劇における追従) は古代ギリシャ・ローマを舞台設定とした3作『ジュリアス・シーザー』、『コリオレイナス』、『アテネのタ

イモン』を扱い、追従 (flattery) のレトリックという斬新な視点からタイトル・ロールの主人公と周囲の登場人物との人間模様および権力闘争を分析した章である。

第1章第1節 “Brutus and his ‘honourable mettle’ in *Julius Caesar*” (『ジュリアス・シーザー』におけるブルータスとその「高貴な性格」) はブルータスの悲劇性をイメージ操作という新たな視座から分析したものである。『ジュリアス・シーザー』はローマ史劇の代表作として帝政／共和制という政治的コンテキストから解釈されるのが通例であり、その典型的な論点はブルータスのシーザー暗殺が共和制擁護のための「高貴」な決断として正当化されるかどうかという問題である。本論文はこうした政治の問題をレトリックという視点から見直し、16世紀人文主義者がレトリック論の一環として示す追従論が事実上の暴君論 (追従のみを好み忠言を聞き入れない君主、追従で民衆を思い通りにコントロールする君主) であることに注目する。そのうえで、本節はブルータスの「高貴」なイメージが周囲の人物、特にキャスカによって作られたものであり、ブルータス本人の演説、説得、共謀の台詞にはむしろ民衆に対する追従が色濃く投影されていることを指摘する。『ジュリアス・シーザー』批評史において、シーザーのイメージは英雄と暴君、ブルータスは共和制の守護神と血腥い暗殺者の両極の間でそれぞれ揺れ動いてきたが、本論文は初演時の観客を想定し、観客たちの前でブルータスやシーザーたちの両義的なイメージが追従のレトリックを通じて生成される過程を具体的に分析した点が評価される。

第2節 “Encouragement and Refusal of Flattery in *Coriolanus*” (『コリオレイナス』における追従の奨励と拒絶) と第3節 “Timon, a Victim of Flatterers and Flattering Artists” (タイモン、追従者およびおべっか使い芸術家の犠牲者) も第1節と同様に、リチャード・ビーコンやサー・トマス・エリオットなどによるレトリック論を接線として『コリオレイナス』と『アテネのタイモン』の劇世界における人間関係と登場人物たちのイメージ形成を検証する。第2節は無敵の戦士でありながら政治的手腕が著しく欠如しており、さらに母親だけには全く頭があがらないという主人公コリオレイナスの特異な性格を同時代の暴君論から説明する。『コリオレイナス』のグロテスクな民衆表象は従来様々な議論を呼んできたが、本節はその特異なイメージに追従を好む「頭のない怪物」としてサー・トマス・エリオットらのレトリック論が反映している可能性があることを指摘できたことは特筆すべきである。第3節は主人公タイモンが取り巻きの追従を真に受けて全財産を失い、人との関わりを呪詛するに至るプロセスを詳細に論じており、レトリック論と合わせて16世紀人文主義者の創作理論 (「詩論」) を引用しながら論じた点が評価される。

[第2章の要旨]

第1章は追従によって主人公が「暴君」化することによって悲劇的結末を迎えるという悲劇的パターンを分析するのに対し、第2章は「ロマンス劇 (Romances)」という呼び名で知られるシェイクスピア晩年の喜劇2作を対象として、「暴君」化しかける主人公が廷臣の忠言によって悲劇的な転落を回避できるという喜劇的なパターンをレトリック論のコンテキストから考察する。『ペリクリーズ』と『冬物語』は本来悲劇であった材源 (『パンドスト』とジョン・

ガワー『恋の告解』を喜劇に翻案した劇作品として知られるが、廷臣の忠言というシェイクスピア独自の意匠が喜劇への翻案にさいして重要な役割を果たしていることを検証する。

第1節“Advice to Tyrants and Its Medical Effects in *Pericles*”（『ペリクリーズ』における暴君への助言とその医療的効果）は主人公ペリクリーズの「心の病」が同時代の医学パンフレットで記述されている「メランコリー(melancholy)」症状と一致し、その治療が廷臣ヘリケイナスの献身的な忠言によってなされる過程を分析し、さらにはペリクリーズの治癒がエンディングの劇的な家族関係の再生につながっていることを明らかにする。廷臣ヘリケイナスという脇役は従来の『ペリクリーズ』論においてほとんど注目されてこなかったが、本節はこの登場人物がシェイクスピアによって材源のヘリカン(Hellican)から役割を拡充された事実上シェイクスピア独自の創作物であることを検証する。さらに本節では、君主ペリクリーズの暴君化を阻止するために創作された廷臣ヘリケイナスの人物像が、16世紀人文主義者が提言する理想的な廷臣像と一致することを指摘する。

第2節“Courtiers’ Rhetoric in *The Winter’s Tale*”（『冬物語』における廷臣のレトリック）も材源とシェイクスピア劇との設定上の違いに注目し、シェイクスピアが『冬物語』においてもプロットの上で廷臣の役割を大幅に拡大しているという事実を指摘する。死んだと思われていた王妃が生きていることがわかるエンディングのどんでん返しがおこるためには、一家離散の引き金となる君主レオンティーズの狂気が治癒していることが必要であるが、その治療のためシェイクスピアが二人の廷臣を独自に創造したという指摘は有益である。第1節と同様に本節でも、一家離散の引き金となる君主の狂氣的症状が同時代の観客にとってリアルなものと感じられるようにティモシー・ブライトやラウレンティウスのメランコリー論などの医学文献に依拠していることが論証され、新たな知見をシェイクスピア研究にもたらしている。

[第3章の要旨]

第3章は、「ロマンティック・コメディー (Romantic Comedies)」と呼ばれるシェイクスピア初期・中期喜劇群の2作を対象として、女性登場人物が語る台詞のレトリックに注目した章である。「ロマンティック・コメディー」はすべて女性登場人物が主人公となり、さらにその多くの作品で女性主人公が男性に扮することがシェイクスピア喜劇の顕著な特徴となっている。本章は友愛、持続力、理性、能弁など、16世紀人文主義者によってしばしば男性の特性とみなされたものが「ロマンティック・コメディー」では女性登場人物たちの示す属性となっていることを指摘したうえで、女性主人公が男性に扮して語る君主への助言、諫言のレトリックが同時代の特殊な人文主義文献に拠っている可能性を指摘する。

第1節“Men’s Flattery and Women’s Advice in *The Two Gentlemen of Verona*”（『ヴェローナの二紳士』における男性の追従と女性の忠言）はシェイクスピアが材源に加えたプロットや設定、人間関係のうえでの変更を指摘し、材源では恋敵となるジューリアとシルヴィアとの関係がシェイクスピア劇では友愛関係となっていることに注目する。本節はこの二人の女性登場人物とプロテウスとヴァレンタインという男性登場人物との対照性に焦点を合わせ、この劇の女性表象ではサー・トマス・エリオットの『善女の弁護 (*The Defence of Good Women*)』

(1540) が利用されていた可能性があることを示す。

第2節 “Twofold Love of Viola and Cesario in *Twelfth Night*” (『十二夜』におけるヴァイオラとシザーリオの二重の愛) は双子と異性装、遭難という複雑な仕掛けを施した『十二夜』の特性を、主人公ヴァイオラの女性としての愛と彼女が扮する廷臣「シザーリオ」の主人への愛という「二重の愛」から検証する。第1節と同様に本節でもヴァイオラの愛情がオーシーノー公爵らの男性登場人物と比較され、シェイクスピア劇の女性表象がその時代にあって特異であった点が指摘される。

[総括、評価]

高根広大氏はシェイクスピアの劇世界における君主と廷臣の主従関係、夫婦や親子の家族関係の表象がレトリック論、医学論、創作論など同時代のエリート文化からどのような影響を受けたかについて着実な検証を行った。審査員から評価されたのは、本論文がシェイクスピア劇の悲劇、初期・中期喜劇、ロマンス劇という三つの主要ジャンルを扱い、それぞれの劇作品に対して先行研究を踏まえた明快な作品論を展開していることである。高根氏はバーミンガム大学シェイクスピア・インスティテュートにおいて修士論文を執筆し、本論文はその修士論文を大幅に拡充・発展したものであるが、同大学所蔵の16世紀イングランド人文主義文献をほぼ網羅的に調査し、シェイクスピア研究においてほとんど注目されることのなかった資料を本論文において紹介した功績も高く評価できる。本論文は全173ページから成る英語論文であり、分かりやすい文体で抽象的な議論を的確に展開する表現能力も審査員一同から高く評価された。16世紀イングランド人文主義の影響を具体的に検討、論証した研究として、本論文はシェイクスピア研究に大きな貢献を果たしており、以上の点で審査委員会は全員一致で本論文が博士(英語英米文学)を授与されるのにふさわしいと判断した。

論文審査主査 中野春夫 教授
FITZSIMONS, Andrew Joseph 教授
篠崎実 特別非常勤講師
(千葉大学大学院教授)